半歩遅れの読書術

川本　裕子

開発経済と平穏死

真実に向き合う勇気知る

大学を卒業して銀行に就職した夏、メキシコが債務危機に陥った。ソブリンデフォルトだ、国家財政の破綻だと世界は大騒ぎになった。一国の経済発展を阻む難問に触れた。それがきっかけで、4年後に留学したオックスフォードでは「開発経済学」を専攻した。

待っていたのは知的マラソンのようなコースだった。膨大な文献を読んで、「経済援助には意味があるのか」といったシンプルだが本質的なテーマに答えるエッセイを書く。それに基づき指導教官と議論を2週に1回、学期中に延々と続ける。どっぷりとその中に浸かり、2年間を過ごした。

私の先生は若きポール・コリア。その後世界銀行の要職に就き、経済発展論の世界的権威となり、「サー」の称号も受けた。彼からは経済発展の条件とは何か、データや実例から徹底的に学んだ。時にそれは衝撃的だった。例えば途上国の飢饉の問題。「人々が亡くなることだけが飢饉の悲劇ではない。深刻なのは、生き残った子供たちにも栄養不良で身体的・知的な障害が生じることだ。つまり、その国は将来の国創りの担い手に不自由するのだ」と教わった。その主張は、良き自然管理を唱える『収奪の星』（村井章子訳、みすず書房）でも変わらない。

人は問題が深刻すぎると往々にして目を逸らしてしまうが、コリア先生は、どんな問題でもあくまで論理的、実証的に分析し、現実的な解に近づこうとする。『最底辺の10億人』（中谷和男訳、日経BP社）では経済発展の中で貧困に取り残された国々の問題を提起して世界的な話題を呼び、英国などで出版された『Exodus』でもあるべき移民政策を論じ、タブーにもあえて挑戦している。その姿勢には今でも励まされる。

英国で学んでいた頃、世界では廃止されたハンセン病の隔離政策が日本でまだ続いていると知った。ハンセン病の人たちとの対話からの思索を綴った『生きがいについて』（神谷美恵子著、みすず書房）を読み、重い気持ちが残ったが、その後日本で隔離が廃止された時には、人々が社会矛盾に関心を持ち続けなければいけない、と強く感じた。

石飛幸三医師の『「平穏死」を受け入れるレッスン』（誠文堂新光社）も、正面からタブーに迫る。自分には望まない延命措置を、なぜ老親には適用しようとするのか。誰もが逃れられない身近な難問を、率直にわかりやすく語りかける。答は人それぞれ、完璧な答はない。ただ、人には寿命があり、老衰は治癒できない。医療・介護の資源も無限ではない。著者は先端医療と高齢者医療の現場の両方に経験のある実践者であり、信念に基づく発言は、医療制度の根本を抉る。高齢化や社会保障問題でも、必要なのは真実に向き合う勇気なのだと思う。

（エコノミスト）